

メアリ・ヘイズの『エマ・コートニーの回顧録』 における私信の政治学

細 川 美 苗

I

『エマ・コートニーの回顧録』は作家自身の体験を大きく反映している。女性が積極的に愛する男を追いかける点、主人公が主に手紙を使って男性とコミュニケーションをはかることや、知的指導者という役割を持つ男性を愛する点などである。作者の体験に基づいた物語であるばかりでなく、実際作者が書いた手紙がそのまま小説に引用されている。フランシス氏という登場人物はウィリアム・ゴドウィンがモデルであるとされており、ヘイズがゴドウィンにあてた手紙の多くはそのまま小説内に引用されている。作品中でエマがオーガスタス・ハーリーに出すラヴ・レターの数多くも、実際ヘイズが思いを寄せる男性、ウィリアム・フレンドに宛てて書いたものである。ヘイズはその目的のために、フレンドに送った手紙の返還を求めることさえした (Wallace 329)。

作品の主人公エマはオーガスタスに寄せる気持ちを隠すことなく、自分のほうから愛を告白する。これは18世紀終盤においては、非常に大胆な行為であった。自分の気持ちを相手に示すのみでなく、エマに求婚した別の男性に対しても、自分はオーガスタスを愛していると公言する。作者ヘイズも女性的な振る舞いの許容範囲を超えた行動で悪名高く、急進主義者フレンドへの愛を公言していた。彼女の奇抜な行動は、反・急進主義者エリザベス・ハミルトンの『現代の哲学者の回顧録』のなかで、女哲学者ブリジュッティーナ・ボザリムとして滑稽に揶揄されている。

このように、作家の体験と作品内容は疑いようもなく類似しているが、本論では伝記的事実に注目しつつも、作品をより大きなコンテキストのなかで解釈したい。当時の思想背景のなかでも、特に感受性と女性性の問題に着目し、主人公の思い切った行動を通じて、ヘイズが何を主張したのかを考える。

II

本作品は主人公エマが養子オーガスタスに宛てた手紙に内包された回顧録という形式をとる。18世紀に渡り、手紙や回顧録という形式の小説は数多く出版された。全体が手紙であるという設定の小説出版は、「1780-9年には空前の年18冊平均であり、1788年には34冊、1789年には26冊という高い記録がある。1790年代はおよそ年15冊である」(Favret 222)。『エマ・コートニーの回顧録』は回顧録と書簡体形式の両方を取り入れており、第1巻と第2巻の冒頭と最終部分にエマの回顧録を受け取る養子に宛てた手紙をおき、その間にエマの回顧録が書かれている。回顧録部分にはエマが書いた手紙が何通も直接引用されている。このような形式は、全体が手紙のやり取りで構成される場合に比べて物語の進行が早く、手紙の書き手と読み手の間で起こる時間的な前後が起きないため読みやすい。一方エマの手紙は直接引用されているので、主人公の内面は読者に直に明かされる。女性が考えを公にするのははしたないと考えられた時代において、女性の内的経験を形式や体面にとらわれずに記すためには、書簡体小説がうってつけであった。というのも、手紙は「変わりやすく、自然体で、野放図なものと考えられていた。ほとんどの書き物の形式よりも、手紙を書くことというのは、その書き手があらゆる礼儀作法を捨て去ることを奨励する」(Favret 24)とみなされていたからだ。また、回顧録でありながら、養子に秘密を打ち明ける告白文である点も、公にするには適さないような内容を含むことを容易にしている。この小説が出版された頃、ヘイズの友人メアリ・ウルストンクラフトも、娘に宛てた自伝的な手紙を含んだ形式の小説『女性の虐待あるいはマライア』(1798、以後『マライア』)を書い

ていた。手紙など個人宛に私見を述べる文章という体裁は、公の文章ならば受けるであろう制約を無視して個人の意見を自由に表現できることから、大きな政治力を持っていた。エドモンド・バークやトマス・ペインをはじめとする当時の政治思想家たちは、次々と手紙であるという設定で意見を公にしていた。

『エマ・コートニーの回顧録』やウルストンクラフトがそれを読みつつ執筆した『マライア』は、書簡と回顧録の形式を上手に取り入れて、非常識だと考えられるような欲望を情熱的に追い求める女性の生涯を綴っている。ウルストンクラフトは、『エマ・コートニーの回顧録』に先立ち、小説『メアリ』と『女性の権利の擁護』を書いている。二人の書いたものには、各自の体験を題材に女性の受ける不当な扱いについて批判するという共通点がある。ウルストンクラフトやヘイズのように、当時女性に許された行動範囲を超え男性の領域へ踏み込もうとする女性にとって、回顧録や手紙に多用される一人称の語りは自分の思想を表現するのに適していた。というのも、そういった語り口は内面を描写する事を容易にし、公にするのに適さないとされる女性の「家庭内及び性的な私生活に立ち入ることができる」(Favret 4)からだ。つまり、慎ましさと概念の元に抑圧され、公に議論されてこなかった女性の権利に関する問題を、あくまでも個人の私的な内面の表現に過ぎないという設定で持ち出すことができるのだ。女性についてその礼儀や作法ではなく内面に迫ることのできる語りは、多感な女性のドラマチックな生き様を描く感傷小説に多用され流行した。感傷小説独特の語りと社会批判を組み合わせた二人の小説においては、「感受性の持つ女性についてのイデオロギーがもっとも明確になり、筆者の伝記と小説が非常に扇情的な形で絡み合っている」と、ジャネット・トッドは評している (Todd 237)。『エマ・コートニーの回顧録』の主人公は、女性のほうから愛を告白するなどもつてのほかである時代に、手紙で自分から求愛し婚前関係を結ぶ提案をするなど女性的な行動規範を完全に逸脱することで、期待される女性像へ挑戦している。伝統的に手紙は公の文書ではないとみなされていたか

からこそ、常軌を逸脱したエマの提案を小説として出版することができたのだろう。実際著者ヘイズにとって手紙は、女性には手の届かない知の領域へ踏み込む手段であった。彼女はエクルズやフレンド、ゴドウィンなど知識人との文通を通じて、一般的には男性のものとされる哲学的な知識や議論の方法を身に付けた。

当時、女性の感受性は読書、特に感傷小説という多感な物語を読むことで培われ、現実離れした行動の引き金となるものとして危険視されていた。『エマ・コートニーの回顧録』は行き過ぎた情熱についての物語であり、ヘイズは序で「ヒロインの間違いは感受性の結果」だと述べている (Hays 4)。その言葉信じるなら、物語はエマの犯した間違いに関する「警告」として読まれることを意図している。つまり、男性と同等の教育を受ける事ができない当時の女性は、軽薄な趣味に没頭する以外は、ロマンスや小説を読み現実離れした考えに夢中になるほかに、感受性が悪戯に助長されるのでエマのような間違いを犯すに至ると小説は告発しているようである。これについて、ヘイズは「情熱的な愛と個人の感情が持つ力を賞賛しつつも、そのような制限されない感情がどれほどのダメージをもたらしえるかについて明白な論証を与えた」(Mellor 48)と、著者が序で表した言い分を認める向きもある一方、ヘイズのスタンスを体面と取る批評家もいる。トッドは、女性の感受性についての本作品の態度は曖昧であり、それは「小説内容とその前書きの間にある矛盾から発せられる」と指摘し、ヘイズが前書きで述べている小説の道徳性を鵜呑みにすることはできないと論じている (Todd 242)。女性の感受性に関しての態度は曖昧であるが、『エマ・コートニーの回顧録』が教育や経済の分野において社会が女性に課す制限を批判している点は明らかだ。この点についてエレノア・タイは、「情熱の赴くままに行動した結果から導かれる当小説の道徳性は大きく矛盾したものであり、曖昧だ。実際、言明されていないが、疑いようもなく計算されたこの作品の論点は、18世紀ミドルクラスの女性に課された抑圧の致命的反動のようである」と指摘している (Ty 46)。しかし、ヘイズがその不正

を正す方法として、ウルストンクラフトが『女性の権利の擁護』で論じたように、女性の理性獲得を主張しているだけではない点は重要である¹⁾。教育や経済的自立を求める女性は、当時の女性観からは外れる者となる一方、理性を身につけたからといって男性となることはかなわない。この狭間でヘイズが提案する理想的女性像はどのようなものなのだろうか。

III

18世紀に女性が主人公の小説といえ、結婚が中心テーマであることが多い。メアリ・デイビスの『コケットの改心』などでは、ヒロインのおろかさは恋人の指導により改善され、幸福な結末へ至る。しかし『エマ・コートニーの回顧録』の主人公エマは、自分の感情や理性に自信を持っており、指導的立場にある男性登場人物の助言には全く耳を貸さず破滅へ向かう。『エマ・コートニーの回顧録』冒頭に示される結婚は、エマの両親のものである。それは放蕩貴族と裕福な商人の娘の結婚で、典型的な階級と富の結合である。母は愛情のない結婚をひどく悔やんでこの世を去ったとエマは述べており、結婚をめぐる愛情と財産問題のうち、エマは愛情を求めることが示されている。

エマの感情を重視する傾向は、読書によって育まれる。それは、女性が小説を読み耽り適切な指導がなされない場合には、小説世界から得た非現実的な知識によって不適切な人格形成がされるという当時の考えの反映である。「エマの読書は小説の歴史となり、そして彼女の成長は小説と連携している恣意的に作られた女性性の発達の要約となる」(Todd 243)。彼女は少女時代におばさんからアラビアンナイトなどを読み聞かされ、年頃にはロマンスを読み耽ってはため息をつき、「勇ましい騎士や高貴な乙女、危険をかえりみない船乗り、恐れを知らぬ盗賊、宮廷の恋人や優雅なコケット」になりきったりしていた(Hays 14-15)。直後にエマは、「私は針仕事が嫌いだった」(Hays 15)と述べており、彼女が現実的な物事よりはむしろ、ロマンス世界の空想に浸ることを好む「感情の牢獄にとらわれた」(Todd 243)人物であると分かる。

週に10から14冊もの本を貸本屋から借りて読み漁るエマの感受性は「あまりにも鋭敏すぎる」(Hays 19)ので、危険であると父親が警戒するほどであった。父はエマの「想像力がお話のなかの妖精世界をさまようままに放置されており、歴史的な事実や科学については全く無知である」(Hays 21)事を憂慮し、彼女に現実的な教育を施すことにした。しかし、父親の自宅で歴史の本などを読まされるエマは、彼の目を盗んではロマンスを読み、ルソーの『新エロイーズ』に涙する。

『新エロイーズ』は英国に感傷小説の流行をもたらした作品で、社会的義務と夫以外の男性への愛情の間で苦しむ女性の物語である。『新エロイーズ』が持つ知的枠組みは、社会的な規範ではなく自然の感情、感性、感受性を行動規範とする行為を賞賛するものである(鈴木14)。以下が『新エロイーズ』に倣った小説に登場する女性の特徴である。

鋭敏で洗練された感受性の持ち主であり、自己の衝動、感性の命ずるままに、激しい情熱の虜になる。未婚の場合は、情熱的に愛する人と性的関係を持ったり、父の勧める結婚相手を嫌って、密かに愛する人と駆け落ちしたりする。人妻の場合は、夫を飽き足らなく思い、他の男性との不義の情熱に身をゆだねる。(鈴木10)

感傷小説は女性を非現実的な空想へ導くものであり、感受性の鋭敏なエマの社会通念上考えられない行動は、彼女の読書経験が生み出す成り行きなのである。

18世紀小説において感傷小説を読んで涙するヒロインの姿は、当人の感受性の強さを示すお決まりの表現方法である。エマが愛するようになるオーガスタスの姓ハーリーは、ヘンリー・マッケンジによる英国の代表的な感傷小説『感情の人』(1771)の主人公名であり、エマが彼に恋をするのは当時の読者の目には当然と映るはずだ。18世紀後期には、ヒロインがその感受性の強さゆえ

に過ちを犯すという物語がパターン化しており、オーガスタスへの情熱的愛情が彼女を破滅に導くことも予想可能である。結婚しないことを条件に親類から年金を受け取るオーガスタスを愛するエマは、社会的義務と自らの感情の間で悩んだ末、もちろん感情に従う。ハーリーに婚前関係を結ぶ提案をするのだ(Hays 124)。結婚を待たずして関係を持つことは、感情に重きを置く感傷小説の主人公が犯す典型的な過ちである。

読書に没頭するエマが他の感傷小説のヒロインと異なる点は、物語に登場する高貴な乙女のみならず、性差の枠を超えて、求愛する騎士、騎士の前に現れる海賊や盗賊などにまで同一化する点である。性差の境界を逸脱する傾向は、エマの成長過程においてすでに表れている。成人したエマは、自分の方から愛情を表すという男性的な行動をとるにとどまらず、明らかにエマを避けている相手に再三求愛の手紙を送る。エマは生まれてすぐに母をなくし、父親はほとんどエマの成長に関心がない。親戚の家を転々とするのを余儀なくされたエマは、適切な指導を受けぬまま、関心の向くままに本を読み耽けり、小説に描かれる現実離れした行動基準に則って行動する羽目に陥る。エマの成長に示されるような、環境が人格を形成するという考え方は、ゴドウィンの思想的影響でもあり、すでにヘイズが読んでいた『ケイレブ・ウィリアムズ』、『エマ・コートニーの回顧録』出版時期に執筆されていた『マライア』、ウルストンクラフトとゴドウィンの娘メアリ・シェリーが後に執筆する『フランケンシュタイン』などに共通して表れる。

エマはオーガスタスに会う前から彼の肖像画を愛し始め、「彼は寝てもさめても私の空想のなかのサン・ブルーであり、エミリウスであった」(Hays 59)と述べ、彼をルソーの小説の登場人物²⁾と同一視している。彼女は読書から得た知識に即して現実を理解し、ロマンスの登場人物のように振舞う女キホーテに類する人物といえる。『新エロイーズ』を読んだ影響はエマの人生から「決して消えることなく、死ぬ瞬間まで続く出来事の長い鎖を生じさせしめた」(Hays 25)のだ。現実を正しく理解できないエマは、彼女の度重なる求愛

に辟易したオーガスタスから冷たい手紙を受け取っても、それを偽造だと想像するほどである (Hays 134)。彼女は父が残した「結婚は財政の問題である」(Hays 30) というモットーを無視して、情熱の赴くままに生きていく。しかし、まだ見ぬオーガスタスの肖像への憧れに端を発するエマの愛は、彼女の「内面の延長であり、自己愛がもたらす空想」(Todd 244) である。物語全体は再構築されたエマの一人称の主観に留まる語りであり、手紙は常に受け手の不在において書かれるものである。物語中に書き続けられるエマの手紙にはほとんど返答がない。小説全体は実体無き相手に向かう報われぬ欲望の独白で、孤独に成長したエマの疎外をことさら強調する形式をとっている。

IV

エマは『新エロイーズ』を読んだことに自分の人生は大きく影響されたと述べているが、それを読んでいる途中で父親に取りあげられており、小説を最後まで読んでいない。『エマ・コートニーの回顧録』の結末は、『新エロイーズ』のそれとは大きく異なっている。結末で命を落とす『新エロイーズ』のヒロインに対し、エマは生き残り、彼女の娘とオーガスタスが死んでしまうのだ。エマは小説から得た知識に基づいて行動するものの、典型的な感傷小説のヒロインとは異なるキャラクターなのだ。

エマが求めているのがロマンスに登場する騎士であったなら、裕福なモンターギュの求愛と彼との結婚は満足のゆく結末であっただろう。しかし彼女は「ずっと見つけるのが困難なもの、つまり彼女と平等でありながら彼女を崇拜し、彼女を愛しそして敬う」(Todd 244 傍点原文) 男を求めているのだ。さらにエマは『新エロイーズ』に出てくるような強烈な感情の模倣をするが、結末で命を落としたりはしない点についてアンヤーナ・シャルマは「死は社会的逸脱行為の成り行きからの想像上の回避であるとヘイズは示しているようだ」と指摘している (Sharma 161)。エマは感情の虜となるが、その感受性は彼女の命を奪うどころか、力強さの源となる。エマの感情は社会的不平等に敏感に反

応し、粘り強くそれと戦う政治的な力となる。エマの行動は「18世紀大衆小説に登場するそれまでのヒロインとは決定的に異なっている。長く連絡の途絶えていた親戚からの信じられないような相続をエマに与えるという不自然で強引な解決を待つのではなく、ヘイズは神の救いという望みがない現実の状況にエマを立ち向かわせた」(Sharma 157)。『エマ・コートニーの回顧録』では、過度の感受性のために窮地に陥ったヒロインは空想的なお決まりの結末へ向かわされるのではなく、現実的な対応を迫られる。

しかし社会的規範を逸脱した女性が直面する現実とは厳しいものであった。彼女のオーガスタスへの愛は報われず、財産も身寄りもないエマにはオーガスタスへの愛情を貫く手立てはない。「いかなる男であろうとも、愛情を感じていなければ、単に収入だけのために結婚しない」(Hays 56)と言い張り、一度は拒絶した相手との結婚に応じるほかないエマの無力さは明らかだ。意にそわぬ相手との結婚に屈して貧困を逃れるしかない惨めな自分の状態を、エマは社会における女性全体の境遇として一般化し、批判を社会全体へ向ける。

活発で勤勉、正直な自立を手に入れることを可能にするようないかなる方面にでも能力に従事させることに前向きでありながら、精神が甘んじて受け入れることのできないもの、つまり隷属への墮落以外のいかなる道も私に対して閉ざされているのを見た。哀れな女！—野蛮な専制の鋼鉄の手によって打ち砕かれ、弱々しく甘やかされ、俗悪な愚かさの隷属となるようしつけられている。貧窮の冷たい風からは尻込みし（有害な教育があなたの弱々しい肉体をそれに対して刃向かうことに適するようには全く作らなかった）、甘やかしてだめにしてしまう者の甘い言葉にあなたが耳を傾けたとしても驚くにあたらない。(Hays 163)

エマの主張によると、女性は自立する能力を奪われ、男性の庇護がなければ生きていくことができないように教育されている。つまり奴隷状態におかれてい

なのだ。個人の経験を一般化して社会批判を行う小説のスタイルは、ゴドウィン等を中心とする急進主義小説の典型的なパターンである。『マライア』の序においてウルストンクラフトはこの点を明確に言明している。

多くの箇所では、私の主たる目的—すなわち、不公平な法律や社会の習慣から起こる、女性特有の苦痛や抑圧を示したいという欲望—を犠牲にしたならば、出来事をもっと劇的にさせることができたであろう。

物語を創作する際、この見解が私の想像力を抑制した。この物語は一個人のというよりむしろ女性一般の話としてみなされるべきである。

(Wollstonecraft 73)

女性が社会的に不平等な立場に置かれていることを告発する点は、ヘイズとウルストンクラフトに共通している。しかし、女性の感受性に関する両者の態度は異なっている。ウルストンクラフトは『女性の権利の擁護』において、感受性を女性解放の妨げとして、理性を身につけることによってコントロールすべきものとみなしている。一方ヘイズは、感受性の強さを女性が哲学的な思考をするための原動力と見ている。「哲学は感情を統制しなければならない。そう言われています。しかし哲学は、私の感情に熱狂を与えてきました！ 情熱とは何でしょう？ 力の別の呼び名に過ぎないのではないですか」(Hays 86)。さらに自分を愛するようとオーガスタスに強要するエマは、このようにいう。

あなたは一度こういいましたね。「我々の心の感受性を理性によって打ち負かすのが我々の務めだ」と。でも、なぜなのでしょう？ そうならば、無感覚であることが人間性が完成された姿なのでしょう—そして、その人間性は優しく社会的な愛情によって洗練され調和に導かれることはないのでしょうか？ 精神に理性をお授けになった存在は、心に感受性というも

のをお与えになったのです。(Hays 81)

また、ゴドウィン的な登場人物フランシス氏に過度の感受性をたしなめられたエマは、「あなたは私の理性が情熱を補助するもの、いやむしろ情熱こそが理性の原動力となっていることをお分かりにならないのですか？ これらの矛盾、これらの対立が精神の活動力を喚起しないならば、私も怠惰と無気力のうちに飼い慣らされるかもしれません」(Hays 142)と答える。つまり無感覚に既成の女性像という型にはまり無気力に生きていくのではなく、女性らしさという概念を使って押し付けられる不正に力強く反応し、情熱的に自らの理想を追い求めるのがエマの生き方である。ゴドウィンに代表されるような理性一辺倒の哲学ではなく³⁾、女性の特質とされる感情に理性を融合させた理想を求めている点を、ヘイズの思想の特質と評価できるだろう。エマは「それまで書かれた小説のページには存在したことの無いヒロイン」なのである(Sharma 141)。

ヘイズは序においてエマの行動は女性全体へ向けた警告だと述べている。さらに小説中ではエマが自身の行動は「一般的に模倣されることを勧めるようなものではない」(Hays 89)と言っている。マリリン・バトラーも指摘しているように(Butler 44, 54)、これらの言葉は、理性によって感受性をコントロールするように勧めているようである。しかしエマは上記の言葉の直後に、以下のようにも述べている。

自然によって女性は優しい愛情を特に感じやすいように作られている。

『自然の声は人工的な教訓によって沈黙を強いられるには、あまりに力強い。』これらの愛情を最高に感ずるためには、文学によって豊かにされ、想像力と内省によって広げられた精神が必要である。(Hays 89)

ルソーの性善説を信じ、「人工的な教訓」が人間を墮落させる原因と考えるな

ら、自然によって創られた感じやすい心に従い愛情を求めることは非難されるべきではない。「情熱と力は同義ではないのですか」(Hays 147)というエマの問いは、強い感受性を持つからこそ、女性は不正や間違いを敏感に感じることができ、またそのことが不正に立ち向かう力の源となるという意見の表明である。理性ではなく感情の強さがエマに政治的主体となる契機を与えていると、ミリアム・ウォレスも指摘している (Wallace 246)。この信念が一貫してエマを突き動かしており、過度の感受性についての忠告は、小説を受け入れられやすくするための表面的な繕いと考えられる。

しかし、感傷小説の枠組みを使って急進思想を表すヘイズの試みは、成功したとはいいがたい。突飛な行動を繰り返すヒロインについての批判的距離を欠いた一人称の語りは、作者の生涯と大きく重なっていることもあり、読者の道徳心に不安感を与えた (Sharma 158)。読者にとって「彼女 [エマ] の欲望の利己主義は偽装されることなく、エマのようなありえない社会存在へと帰結する個人的な感受性の発展は、みだらで耳障りで独断的なもの」となり、小説が好意的に受け入れられることは少なかった。(Todd 245)。

V

エマの感情を記した何通もの男性宛ての手紙に対して、返事がなされることはほとんどない。エマの手紙は彼女の情熱についての説明であり、求愛に答えるようにという要求である。これらについてまじめな返答をしない男性側の態度は、女性の欲望を無視し、存在しないものとして抑圧する男性社会のあり様とパラレルである。主体的欲望を持つ女性を不愉快に思うオーガスタスの内心は明らかだ。美人で快活だが教養がない女性と結婚した知り合いをひどく不快に思うエマに対してオーガスタスは、「くだらないものは不安になるような深刻な事態をもたらせることはない。ときには、より優れた女性の気質のほうが我慢ならないこともある」(Hays 114)と述べている。つまり、男性に深刻な不安を与えうる優れた女性よりも、無知でも美人で気立てがよい者と結婚す

るほうが気楽であるということだ。このような男性側の意識が女性の無知および彼女らの従属を生み出しているとして、ウルストンクラフトは『女性の権利の擁護』で女子教育の重要性を議論したのであり、エマの反発を通してヘイズも同様の主張をしているのである。またこのようなオーガスタスの反応は、読者に彼が本当にエマが理想とする男性なのかについて疑問を抱かせ、彼女の理想を体現するような人物が、彼女のありえない空想以外の場所に存在するののかという不安さえももたらす。彼は「疑わしい過去を持つ立派な人物」(Ty 54)であり、外国人女性と結婚しながら、お金を得るためにその事実を隠している者である。

気立ての良い美人と結婚することを良しとするオーガスタスの意見に対してエマは、「ああ、なんて不条理なんでしょう。もし優しさというものが、完成した理性でないならば、それは私がいまだに決して正しく理解していない素養なのだわ」(Hays 114)と不平を述べる。しかしオーガスタスはこれには答えず、エマの意見は再び黙殺される。彼女の手紙や発言は、ほとんどの場合答えられないままであるが、この小説の構造はエマの不平が聞き届けられる可能性をもたらす。

エマのオーガスタスへの愛情は結局報われないが、二人はそれぞれ別の相手と結婚し、エマは同名の娘を、オーガスタスは同名の息子をもうける。オーガスタスの事故死に際してエマは彼の息子オーガスタスを引き取り養子にする。物語開始時にエマの娘はすでに死亡しており、物語全体は養子オーガスタスに宛てたエマの回顧録である。養子オーガスタスもエマが過去にそうしたように、ある女性を情熱的に愛しており、彼の情熱に対する警告としてエマは自らの生涯を語っている。フランシス氏やオーガスタスに向けて発したエマの内面は、回顧録として養子オーガスタスに受け取られる。養子オーガスタスは父親よりも養母エマに似ている。母から息子への特質の継承は、本来女性のものとされる感受性を男性の特質とすることで、理性と感情の二項による性差の二分を攪乱する契機となる (Rajan 228)。また、常に男性によって引き受けられて

いた指導者としての役割を、エマは養子オーガスタスに対して担っている。物語内容とは関係の薄い次世代に属する登場人物との関係において、エマの訴えは聞き入れられ、性差にもとづく主従関係から彼女は解放される。

また作者ヘイズの理想が実現する可能性も残されている。18世紀の読者は物語の登場人物が実在すると想像することを好んだと指摘したうえで、ラヤンは読者が小説内に描かれたものと同様の欲望を追求したり思い描いたりするだろうと述べている (Rajan 220)。『エマ・コートニーの回顧録』は「道徳的な冒頭と結末部分にも関わらず、作品全体の傾向は感情、興奮、そして感受性の制限されない表現」(Ty 58)であり、「作家が感受性の『過多』に対する警告としている登場人物に読者が同一化することを、誰も妨げることはできない」(Barker-Benfield 359)のだから、『エマ・コートニーの回顧録』はエマのような欲望を持つ女性を生み出す小説となりうる。女性読者のうちに再生産された欲望は、オーガスタスのような男性を「不安に陥れる」欲望の主体としての女性を実在させる。小説として出版された手紙に書き付けられた女性の抱える問題は、読者のうちに反復され女性一般の問題へと拡大する。このように男性と女性、現実とフィクション、一般論と個人的経験などの境界を揺るがすところに、ヘイズの理想が将来実現する望みがある。

残念なことに、このようなヘイズの理想追求の表現としての『エマ・コートニーの回顧録』は、娘の死という代償を負っている。エマの理想は息子の手に渡ることで聞き届けられる可能性を残す。エマには同名の娘が生まれるが物語開始時には死んでいる。息子オーガスタスはある女性を愛しており、もしエマの娘が生き延びていたなら、他の女性を愛する息子オーガスタスと娘エマという親世代と同様の三角関係が生じる。息子オーガスタスが12歳になるまで娘エマは彼と同様に育てられた。成長の過程で娘エマは息子オーガスタスと張り合い、ときには彼を追い越すほどの進歩を見せることもあった (Hays 193)。進歩的な母に育てられた娘エマは「慎ましさとというもっともらしい名の元に女性のうちに育成される意思の弱さを超越することを喜んでいた」(Hays 194)。

娘エマは教育的不平等を免れており、父親からの遺産もある。母親が苦しんだ教育的、経済的苦境とは無縁である。母親が理想とする状況にいる娘エマと息子オーガスタスの関係が、親世代とは異なる結果を生む可能性は、娘が14歳で亡くなることにより台無しとなる。母親エマの生涯とその願望は娘エマの手によって達成されるのではなく、息子オーガスタスとの関係においてのみ理解され支持される可能性がある点は、エマと作者ヘイズの理想の実現が、最終的には男性の手に託されていることを示すのかもしれない。『エマ・コートニーの回顧録』出版年に執筆中であったウルストンクラフトの『マライア』は、息子ではなく娘に託した母親の手記を内包する設定である。ウルストンクラフトは『マライア』の結末を思い描くことすらできず小説は未完に終わり、手に負えない結末はまたもや男性によって閉じられる。小説の最後の声は登場人物である「マライアのものでも、ジェマイマのものでも、語り手のものでも、ウルストンクラフトのものでもない。そうではなく、それはゴドウィンの声である」(Todd 251)。エマの空想世界にのみ存在するようであるオーガスタスや彼との理想的パートナーシップ、執筆されなかった『マライア』の結末のように、実現されていない理想を追う女性の声に決着をつけるのが男性だったとすれば、女性の願いを女性の手で実現する事を思い描くには、18世紀終盤は時期尚早だったということだろう。

引用文献

- Barker-Benfield, G. J. *The Culture of Sensibility: Sex and Society in Eighteenth-Century Britain*. Chicago: U of Chicago P, 1992.
- Butler, Marilyn. *Jane Austen and the War of Ideas*. Oxford: Clarendon press, 1975.
- Favret, Mary A. *Romantic Correspondence: Women, Politics & the Fiction of Letters*. Cambridge: Cambridge UP, 1993.
- Hays, Mary. *Memoirs of Emma Courtney*. Ed. Eleanor Ty. Oxford: Oxford UP, 1996.
- Mellor, Anne K. *Romanticism & Gender*. New York: Routledge, 1993.
- Rajan, Tilottama. "Autonarration and Genotext in Mary Hays' 'Memoirs of Emma Courtney'." *Romanticism, History, and the Possibilities of Genre*. Eds, Tilottama Rajan and Julia M.

- Wright. Cambridge : Cambridge UP, 1998.
- Sharma, Anjana. "A Different Voice : Mary Hays's *The Memoirs of Emma Courtney*." *Woman's Writing* 8 : 1 (2001) : 139-167.
- Todd, Janet. *The Sign of Angelica : Women, Writing and Fiction, 1660-1800*. New York : Columbia UP, 1989.
- Ty, Eleanor. *Unsex'd Revolutionaries : Five Women Novelists of the 1790s*. Tronto : U of Tronto P, 1993.
- Wallace, Miriam L. "Mary Hays's 'Female Philosopher' : Constructing Revolutionary Subjects." *Rebellious Hearts : British Women Writers and the French Revolution*. Eds. Adriana Craciun and Kari E. Lokke. Albany : State University of New York Press, 2001. 233-260.
- Wollstonecraft, Mary. *Mary and The Wrongs of Woman*. Oxford : Oxford UP, 1976.
- ウルストンクラフト, メアリ『女性の虐待あるいはマライア』川津雅江訳 アポロン社 1997
—『女性の権利の擁護』白井堯子訳 未来社 1980
- 鈴木美津子 『ルソーを読む英国作家たち—「新エロイーズ」をめぐる思想の戦い』国書刊行会 2002
- 千葉麗 『語(られる)母性—『女性の虐待』における能動的感受性の地平』イギリス研究ノート 11 (1999) : 1-14

注

- 1) ウルストンクラフトは『エマ・コートニーの回顧録』より後に出版される『マライア』において、『女性の権利の擁護』で表明した理性主義を修正し、理性と感受性を融合させた第三の力について主張をしている。この点については文献表中「語られる母性」(千葉麗)において詳しく論じられている。
- 2) サン・ブルーは『新エロイーズ』, エミリウスは『エミール』の主人公。どちらもルソーによる小説。
- 3) 後にゴドウィンは自分の哲学に人間の感情的な部分への思慮が足りなかったことを認めている。この点に関する彼の理論修正については、『政治的正義』における婚姻に関わる部分の見直しや、『聖リオン』の序における言明が良く知られている。またウルストンクラフトも『マライア』においては、『女性の権利の擁護』で示したような理性主義を和らげている。『女性の権利の擁護』出版から『マライア』執筆の間、ウルストンクラフトは未婚の母となり、エマのように報われぬ愛情について苦しんだ経験から、感情の重要性を認識したのだろう。